

船井情報科学振興財団奨学生レポート/第10回

2023年12月

Department of Economics, Princeton University 山岸 敦

来年6月前後の卒業を目途にしている。そのため、現在は卒業後の進路を決めるための就職活動である。Job Marketと呼ばれて北米の経済学では非常に重視されていて、指導教官らのプッシュを受けながら自分の代表作となる論文を引っ提げてあちこちに願書を10~11月ごろに出す。そのあとは一次面接に当たるオンライン面接への招待メールを神経をすり減らしながら待つ。面接に呼んでもらえていればメールが来るが、この時点で採用候補から外れている場合は待てど暮らせどメールは来ない（不採用通知を送ってくれる大学もほとんどない）。なんとか一次面接の申し込みメールを貰った後は、12月~1月頭にかけて一次面接が行われる。12月の最終週にこのレポートを執筆しているので、ちょうどそのあたりの時期にこのレポートを執筆している。一次面接がうまくいってれば2次面接、つまり現地でのプレゼン等に招待してもらうことができ、ここでのパフォーマンスを見て採用の可否が決まる。

残念ながら、就活の途中である関係上現時点ではあまり詳細なことが書けないでいる。就職活動の経過や結果報告については次回という形でご容赦いただければと思っている。

ただそれだけではあまりに味気ないので、今のところの所感を少しだけ書かせていただきたい。先方からの来るのか来ないのかもわからないメールを待っている間、学部生の時に日本で受けたことのあるインターンの面接のことを思い出していた。その面接は個人的にはうまくいったと思ったのだが、結果的には落ちていた。落ちて不採用理由の通知などないので、なんで落ちたのかわからない。自分という存在のどこかわからないけれど、しかし何か確実に、しかも強く否定されたような気がして陰鬱な気分になったことを覚えている。それに比べてアカデミアでは、論文という目に見えるものがあってその量と質によって採用の大部分が決定されるので、もっと透明でいいじゃないか。受かっても落ちても実力勝負なアカデミアでやっていけたら、採用されなくても納得がいくと思った。

しかしやはり、いざ自分がアカデミアで就活をしてみると完全に納得がいくというのは難しいなと実感している。論文の質や量が多分に主観的に評価されるというのを実感できたのは、大学院に入ってからであるし、何なら留学してからである。もちろん論文という実在物が介在してそれが重視されている分だけ、「面接官が僕の顔面や声が好みだったか」みたいな、あまりに掴み所もなく改善もし難い要素は弱そうでもそれだけでも個人的にはありがたいのだけれど、とはいえそういう要素から逃れることは不可能だなとも思われる。納得できる基準でバツサリ捨てられるのは潔くあきらめられても、自分の何がいけなかったのかもわからぬまま無下に断られてしまうのはなんとも、やるせない気持ちになるものである。過ぎたことや自分の手の届かないことは考えないで目の前の就活に集中するべきというのは重々承知なのだけれど、どうしてもこの辛さだけは慣れることはないかもしれない。何はともあれ、自分に今できる範囲でベストを尽くして、一番納得のできる選択をしたいなと願うばかりの年の瀬である。